

## 国際都市上海—社会的文化的総合研究

Shang-hài: An Interdisciplinary Study of a Cosmopolitan City

総括研究員：藤原康晴

分担研究員：桂川光正 大川俊隆 倉橋幸彦 村田好哉 常松 洋  
(全員教養部)

当該共同研究の計画 (必要性および目的等)

研究会日程

1991. 10. 29

藤原康晴 「中国近現代史研究の最近の動向」

1991. 11. 19

桂川光正 「上海租界の形成」

1991. 12. 24

大川俊隆 「上海時代の羅振玉」

1992. 1. 28

倉橋幸彦 「上海門径」

1992. 3. 5

村田好哉 「日本近代文学と上海」

1992. 5. 19

常松 洋 「アメリカ人のみた上海」

以上のように研究会のメンバーが研究発表を行ってきた。また資料の紹介などについても研究会のつどに行ってきた。なお、1992. 3. 13から17まで桂川光正、常松 洋、村田好哉、倉橋幸彦などの研究会のメンバーが上海研修旅行に行った。藤原康晴

### 「中国近現代史研究の最近の動向」

藤原康晴

1921年7月末に中国共産党の第一回党大会が上海のフランス租界で開催された。上海は、中国共産党の誕生の地でもあり、中国革命の中心地でもある。そこでは、革命の血と反革命の血が流されていった。

上海で起こった1925年の五・三〇事件、1927年の四・一二クーデターを中心にして、中国革

命における上海が果たした役割について分析した。その際には、事件の経過だけではなく、事件の社会経済史的背景に焦点を合わせて分析した。

また上海は、内山完造、尾崎秀実、長谷川テルなどの日本人が中国革命を何らかのかたちで関与した場所でもある。それらの人たちが、どのようにして中国革命にかかわったかについても考察した。なお今後の研究は、史料については、出来るだけ今まで使われていなかったものを見つけ、使っていく方向で進めていきたいと考えている。

### 「上海時代の羅振玉」

大川俊隆

本プロジェクトにおける私の研究目的における昨年度の作業は、その前提的なものとして、羅氏の孫にあたる継祖氏によって書かれた、祖父の伝記『庭聞憶略』中の、羅氏の上海時代とそれ以前の淮安時代にあたる部分の翻訳と注釈を施すことを行った。継祖氏による祖父の伝記は、従来見られなかった史料を以って、溥儀の『我的前半生』の中で形成された羅振玉像を訂正せんとするものであり、従来ほとんど省りみられなかった上海時代の羅氏の活動とその思想にも新史料で、実像にせまろうとする意欲的なものであるが、これを批判的に検討することにより、政治的には「漢奸」として断罪され、古代研究家としては肯定的に評価されてきた羅氏の評価の二重性を解明することが期待できると考えられる。

### 「上海租界の形成」

桂川光正

昨年度は研究初年度であるので、まず、基本的な文献資料の収集に努めると同時に、上海の共同租界とフランス租界の形成と発展の概要を知り、租界という制度そのものについての基本的理解を得ることに努めた。

この結果、第1に在華外国諸権益の中での租界の位置付け、租界の果たした役割などの一般的问题について、一定の理解を得られた。第2に、上海共同租界・フランス租界の成立と発展の道筋を追うことにより、両租界の設置と拡大の法的根拠、租界行政機構とその特徴もある程度明らかにできた。第3に、日本で刊行された文献資料はほぼ集めることができたほか、先頃の上海研修旅行で中国側の研究書も購入できた。

今年度の課題は、昨年度の成果を更に精緻なものにすること、中心テーマである日本人社会の形成と発展の問題をこれと関連付けながら考察していくことにある。このため、未刊行資料（たとえば外務省文書）の調査などが必要であろうと考える。

## 「日本近代文学と上海」

村田好哉

近代以降国際都市へと発展するに伴い「日本からもっとも近い西洋」都市の一面をもつ上海には多くの日本人が訪れた。すでに永井荷風は「上海紀行」(明40.1907年)のなかで「東洋一の貿易港」と述べているがその後も漱石・芥川・横光などにより上海は多くの文学作品に登場することとなる。このなかで上海を1930年前後に多くの日本人が「魔都」のイメージで捉えていたことは注目されよう。

三月五日の研究発表では明治四十年(1907)の荷風「上海紀行」から平成三年(1991)の井上ひさし「シャンハイムーン」に至るまでの上海を描いた小説・紀行文三十編余を取り上げ各時代において日本の作家達が上海といかにかかわり作品に描いてきたかの考察を試みた。また三月十三日から十七日にかけての上海研修旅行において実地調査及び資料収集を行った。

ここ数年来の「上海ブーム」のなかにあって夥しい上海関係の書物が刊行されている。近代以降多くの文学者をひきつけてやまない国際都市上海のイメージの変遷の一端を1930年前後の文学作品の分析を通じて今後明らかなものにする予定である。

## 「上海門径」

倉橋幸彦

本研究における研究分担の中心課題は、〈三十年代上海における出版と文学〉である。ただ、初年度である昨年は、その中心課題が扱うところの前段階となる二十年代の上海—つまり租界—に関する文献資料の収集を中心に研究を行った。これらの基礎作業を通じての収穫は、〈租界における中国〉もしくは〈中国人にとっての租界〉という新しい研究テーマが生じたことである。しかもこれらの課題は、`経済特区、—いわば現代版租界—政策を進める昨今の中国状況からしても、きわめて現代的意義をもつものといえよう。そのことは、ここ数年中国で租界に関する資料が大量に出版されていることから充分に窺うことができる。本年度は、この新しいテーマを通して中心課題となる〈三十年代上海の出版と文学〉について考えてみたい。つまり、二十年代租界における文化状況がどのように三十年代上海の出版と文学に影響をおよぼしているかという点を中心に研究を進めることにする。

## 「アメリカ人がみた上海」

常松 洋

### 研究目的および成果

アメリカが国務長官ジョン・ヘイの「門戸開放」によって、中国への進出を開始したのは、19世紀も末のことである。もちろんそれまでにアメリカ人が、たとえばイギリス経由で、あるいは宣教師の報告等で中国について無知だったわけではないが、それらの情報から構築されたイメージが現実とはほど遠かったのも事実である。

中国との交流が現実が始まっても、それらのイメージはなかなか修正されない。それどころかむしろ新たな「神話」が形成されることになった。急激な社会変化、自然災害による凶作、帝国主義列強の侵略などの犠牲者としての中国人、それに対して善意から真の友人であろうとするアメリカ人という優越感に根差したパタナリストティックな対中国（人）観が支配的だった。

そのような全般的文脈の中で、「東洋のパリ」とか「魔都」といったイメージが常につきまとう上海を、アメリカ人がどう把握し、どう反応したのかが本研究の課題である。その歓乐的雰囲気にもドップリ浸かった者もいれば、たとえばスメドレーのように革命運動に積極的に関わった者もいた。もちろんこれらの多様な反応は、一部はそれぞれの個性に由来するものだろうが、中国のみならず本国アメリカからも切り離された「自由な」租界だったからこそ、そしてそれゆえ各人が根無し草になることを余儀なくされたからこそ可能だったと考えられるのではないだろうか。